

平成30年5月1日

千葉県立松戸国際高等学校関係者 様

校長 加茂 進

千葉県立松戸国際高等学校 校長室日誌（アナログ版）

本年度の学校経営方針については、本校のホームページの「校長室」に掲載いたしました。また、普段の本校の教育活動等の様子は、「校長室」の中で「校長室日誌」として、紹介させていただいております。

今回、「校長室日誌（アナログ版）」を配布させていただくのは、私の学校経営方針の根幹となる考え方、「社会力」について、丁寧にお伝えしたいと考えたからです。

「社会力」について

今年度の私の学校経営方針の中には、副題として、「～学校を拠点とし、すべての生徒・保護者・教職員・地域住民が、心身ともに健康で、幸せな生活を送ることができる社会の構築を目指して～」という言葉が入っています。

私たち松戸国際高校教職員のミッションは、言うまでもなく、松戸国際高校の生徒のために働き、松戸国際高校をより良い学校とすることです。

しかし、松戸国際高校だけが良くなればそれでよいのでしょうか。そうではなく、本校を良くすることで、本校を取り巻くすべての人たちが、すなわち社会全体が、より良いものとなって欲しい、そんな願いを込めさせていただきました。

生徒の「社会力」を高めたい、これがこの願いの根っこにある考え方です。

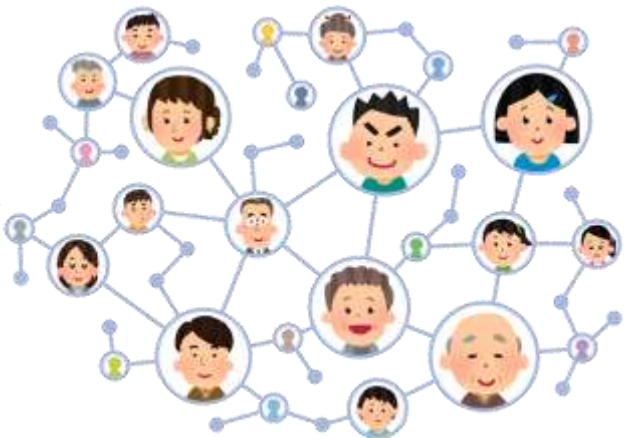
「社会力」は、筑波大学名誉教授、門脇厚司氏が提唱する新しい概念です。氏によれば、「社会力」とは、人が人とつながり社会を作る力、そして、よりよい社会を創ろうとする意欲と構想力（よきビジョンを考える力）と実行力（考えたことを実現する力）のことで

す。よく「社会性」とか「社会を生き抜く」という言葉が使われます。「社会性」は社会に適応することです。つまり仮に好ましい社会ではなくても、その社会に順応する能力とも言えます。「社会を生き抜く」ということは、仮に激動する住みにくい社会であっても、自分の力で突き進んでいく能力とも言えます。つまり、どちらの言葉も社会に対する個人的な対応力というニュアンスが感じられます。

「社会力」はそうではなく、仲間と協力してよりよい社会を作ろうとする力、すなわち、共に生きる、「共生」の力です。

人は、一人一人違いがあります。同じ人は一人もいません。それぞれに個性があり、得意分野があり、逆に不得意分野があります。興味や関心の方向性も違います。

一方、人は一人で生きていくことはできません。生まれたての赤ちゃんは、先ずお母さんの声やにおいを感じて、安心します。それから少しずつ、周りの人間を認識しながら、様々な人とのかかわり合いの中で、「学習」し成長していきます。



生まれてすぐに、人とのかかわりを遮断したとしたら（もちろんそんなことをしたら人権侵害ですが）、子どもは生きていけるでしょうか。言語学のある学説（ノーム・チョムスキーの「生成文法」）では、人は生まれながらにして脳の中に言葉をしゃべったり理解できたりするためのプログラム（ユニバーサル・グラマー「普遍文法」）が組み込まれていると考えています。赤ちゃんは周りで話す大人の会話を耳からインプットすることによって、そのプログラムが作動し、日本語をしゃべる環境では、日本語を、英語をしゃべる環境の中では、英語を習得していくそうです。

人とのかかわりを遮断された子どもは、おそらく言葉を習得することはできないでしょう。それどころか、日常生活もうまくできない、ある意味赤ちゃんのままになってしまうでしょう。人は、あらゆることを、人とのかかわりの中で、学習するのです。人は、社会の中で育てられ、人となる。つまり、人は社会的な動物なのです。

今年度の始業式と入学式で、私は在校生と新入生それぞれに、「私たちは何のために学習するのか。」と問いかけました。

大学受験を突破するため、自分の目指す進路を実現するためなど、個人的な目標を達成する、つまり、自分のために「学習」することは、もちろん、大事な理由でしょう。

しかし、私は、「学習」する、もっと大きな理由があると考えています。「学習」は社会のためにするもの、自分が生きているこの社会をより良くするために行うもの、というのが私の考えです。

生徒諸君には、生徒同士・生徒と教職員・保護者・地域住民等とのかかわりあいの中で様々なことを学びあい、未知の課題に対して協力して解決策を考え、自分が学んだことをよりよい社会を作るために発揮してもらいたい。そして、自分だけでなく周りの人たち、社会全体を幸せにしていける人材に育ててほしいと考えています。また、そのような人材を育成することが、本校教育のミッションであると考えています。

本校生徒には、高い「社会力」を培う素質があります。すれ違う時にしてくれる気持ちの良い挨拶の声。新学年の先生を発表するときに、自然に湧き上がってくる“拍手”。入学式の式場設営と片づけを率先して行う姿。

また、本校教職員の教育活動にも、「社会力」向上につながる様々な要素がすでに備わっています。廊下を歩くと、生徒同士が活発に議論しあったり、助け合ったりしながら進める授業が、そこかしこで見受けられます。主体的・対話的で深い学び、所謂アクティブ・ラーニング型の授業です。アクティブ・ラーニング型の授業は、学びあいや協力を通じて互いを高めあうものであり、まさに「社会力」向上に直結するものです。さらには、国際高校ならではの環境として、様々なルーツを持った仲間たちとの自然な交流もあります。

本校の持っているこのような「強み」をフルに生かし、さらに発展させ、生徒一人一人の「社会力」を高めるための教育活動を進めて行きたいと考えています。

「社会力」を高めることは、学力を高めることにもつながります。なぜなら、「社会力」の高い人間は、「学習」へのモチベーションも高いからです。自分のためだけに「学習」しても、満足するのは自分だけです。しかし、人のため社会のために「学習」すれば、自分だけではなく、周りのたくさんの人たちが喜んでくれるからです。



「社会力」を高めることは、豊かな心を育むことにもつながります。なぜなら、「社会力」の高い人間は、人への思いやりや心づかいができるからです。自分の振る舞いや態度、TPOを踏まえた服装などが、適切で無理がなく気持ちが良く、円滑な人間関係を築くことができるからです。



「社会力」を高めることは、「～自己の錬磨～・～他者の尊重～・～社会への貢献～」という本校教育目標の実現に直結するものであると信じています。

参考文献

「子どもの社会力」
「社会力を育てる」－新しい「学び」の構想

門脇厚司 岩波新書
門脇厚司 岩波新書